



我が家で一番古い本

『100 Patriotic Poems』

translated by Heihachiro Honda

Hokuseido 1944年発行

司書教諭 角井 貴乃

我が家で一番古い本は祖父の形見

司書教諭・角井先生が語る 平和への思い

【編集者】 お持ちいただいた趣のある本が、今日のインタビュの主役ということですが、お持ちの本について教えてくださいませんか？

【角井】 こちらが私の本棚で一番古い本です。祖父から譲り受けた1944年発行の『ONE HUNDRED PATRIOTIC POEMS』という本です。

【編集者】 お祖父様から？いただいたのはいつのことですか？

【角井】 祖父は私が18歳くらいのころに他界したのですが、亡くなる直前にもういました。当時祖父は、形見としてゆかりの品を家族一人一人

に手渡していたのですが、その時に私はこれをもらったんです。私だけ品がほかの家族とはちよつと毛色が違っていたのですよ。ほかの家族は腕時計などをもらっていた中、私だけは古めかしい本1冊だったんです。

【編集者】 それを渡された当時、どうお感じになったんですか？

【角井】 家族の中には、ぼろぼろの本1冊だなんてかわいそうだという人もいましたけれど、私はむしろ祖父との絆を感じて、ほこらしく感じていました。これには理由が2つあって、まず、私が司書を志していたことを祖父は知っていて、これ





を渡してくれたという点です。当時、家族みんな私が司書になりたいと思っていたことは知っていました。けれど、やはり10代の将来の夢は変わりやすいですから、ほかの家族はそこまで重くは考えていなかったと思います。そんな中、祖父は司書になるのならこの本を託そうと、手渡してくれたのです。祖父は私の夢に対して「実現するもの」としてとらえていてくれました。そのことが何よりうれしかったですし、同時に大きな責任も感じました。この本は大事に管理しなくてはという気持ちと、必ず夢を叶えなければという気持ち、半分半分といったところでしょうか。

【編集者】 ということは、この本は角井先生が司書として扱った初めての本というわけですね。

【角井】 そうかもしれません。ちょうど進路について悩んでいる時期でしたので、目を覚ます機会になったといえますか。押しずいられたというか。ともかくいい機会でした。

【編集者】 どんなお祖父様でしたか？

【角井】 大正15年生まれで、175cmという当時としては長身。俳句や洋食やカメラが好きなおしゃれでハイカラなおじいさんでした。怒るととても怖かったですけどね（笑）。仕事は、非鉄金属のリサイクル業をしていました。

【編集者】 非鉄金属のリサイクルとは、どのようなお仕事ですか？

【角井】 工場で金属のなにかを作るとき、油をまとわせた金属の板を機械に通して、クッキーみたいに型抜きしていきます。その時に出る穴だらけの板と、削りカスを、工場から買い取ります。そして遠心分離機で油を除去、金属の種類ごとに分別し、今度はまた別の金属の板を作る工場へ売りに行くのです。そこで金属を溶かして板にして…冒頭に戻るわけです。

【編集者】 なかなか説明が難しいお仕事ですね

【角井】 そうですよ。幼稚園のころは全く理解して

いませんでした。代わりに「おじいちゃんはお医者さん」だと思ってましたから。けがをした時は、祖父がよく手当てをしてくれていたので、そう思い込んでいたのですよ。幼稚園でも、そういつていたものだから、面談の時に母が驚いて訂正した、なんてこともありましたよ。

【編集者】 お持ちいただいた本について掘り下げていこうと思います。まず、本としてはどんな本ですか？『ONE HUNDRED POEMS』というタイトルからして、百人一首ですか？

【角井】 これは1942年に発売された『愛国百人一首』の英訳版ですね。戦争真っ只中の日本で、愛国心を鼓舞する意図で作られた、異種百人一首のひとつになります。異種百人一首とは、皆さんが知っている百



人一首とは違って、「女性の作者だけ」とか「近世の人だけ」とかで選ばれたものです。ほかに、いろいろなバージョンがあるようですよ。まあ、百人一首の派生版とでもいいでしょうか。

【編集者】 異種百人一首。初めて知りました。

【角井】 実は私もさつき調べて知りました（笑）。

【編集者】 古い本なのでなかなかのストーリーを持っています。1944年発行ということは、日本は戦中ですね？

【角井】 そうですね。実はこの本は、戦時中、祖父が友人から預かった本なのです。大正15年生まれの祖父なので、戦争も生き抜いたわけですが、当時祖父は「予科練生」という立場でした。

【編集者】 海軍飛行予科練習生ですね。

【角井】 そうです。海軍のパイロット候補生のような立場だったそうです。そこで知り合った友人が、いざ戦地に赴く前に、祖父にこの本を手渡したのだそうです。本の最後のページには持ち主である祖父の友人の名前があり、また祖父の字で「20、8、11、應召二際シテ、頂ク。」と書いてあります。戦争が終わる4日前のことです。



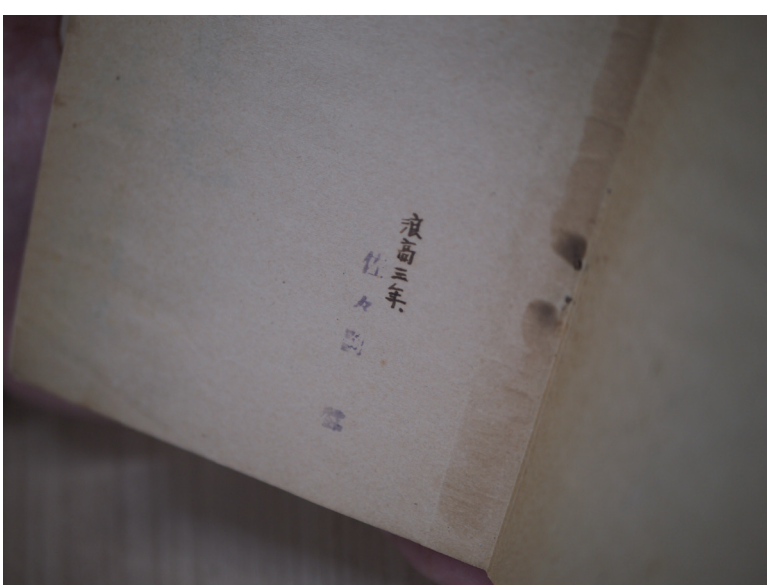
【編集者】 でも、どうして英訳版なのでしょうか？当時、英語は敵性語と言われていたくらいなのに。

【角井】 それは最後のページを見ればわかります。持ち主の名前がハンコでついてありますね。

【編集者】 ほんとうですね。「浪高3年」とお名前のハンコがあります

【角井】 調べたところ、おそらく「旧制 浪速高等学校」でしょうか。現在は大阪大学に併合されて、千里丘のキャンパスに建物だけ残っているとか。祖父曰く、この本は英語の教材として使用されていたのだそうです。

【編集者】 ということは、この方は学生で、英語の教科書を予科練の場に持ってきていたということですね。



【角井】 そうですよ。そこまでして、英語を勉強したいとおられたのでしょうか。当時からしたら、両極端なわけじゃないですか、『愛国百人一首』と英語を学びたい気持ちって。でも、令和の現在、この机の上にあるっていうことの意味を考えないといけないと思います。しかも、最後に友人に託す1冊に選んだのですから。よっぽどの思いが込められているよう

に思います。学びたいことを学べるということも、平和のひとつの条件といえるかもしれませんね。

【編集者】なるほど。ここまで、この本のお話をうかがってきて、歴史的価値もある本だということがわかりました。

【角井】はい。でも、ただ古いというだけではないのです。私は、この本をもらったとき、祖父が残したかったメッセージを、他でもない私に引き継がせてくれたことに言いようのない感動を覚えました。これが、この本をもらったときに感じた誇らしさの2つ目の理由です。

【編集者】メッセージですか。いただいたとき、お祖父様はなんとおっしゃっていたのですか？

【角井】それが。お恥ずかしいことに覚えていないのです。具体的なことは言われていないように記憶しているのですが。というのも、祖父は苦勞事、特に戦争のことについては、あえて多くを語らない人だったのです。ですから、祖父がなぜこの本だけを残したかったのか、私に引き継ぐこと自体にどんなメッセージが込められているのかは、自分で考えるしかなくて、答えがいつまでも出ないんですよ。けれどというか、だからというか、ニュースや新聞のトピックで平和について考えるとき、最終的に私が思い出すのはこの本なんです。祖父が伝えたかったことがあるとすれば、平和

に関するものでしょうから。

【編集者】平和に関することですか。では今は、この本について、どっという風にとらえていらっしゃるんですか？

【角井】うーん。難しいですが、「考えろ」と言われている気がします。

【編集者】平和について？

【角井】というよりも、答えがない命題についてはよくかんがえなさいよ…という感じでしょうか。人に



よって答えが違ふものについて、とも言えますね。平和も同じく全員共通の答えは無いでしょう？平和は大切なことですし、人類の大きなテーマですが、人によって平和な状態って違いますからね。

【編集者】人によって、答えが違ふとは？

【角井】たとえばですね、これも祖父と戦争に関する思い出なのですが、私が小学生の時、祖父と一緒にテレビを見ていたんですよ。その時祖父が、とある差別用語をね、使ったのです。私は大好きな祖父がそうした言葉を使ったことがショックでしたし、小学校で習って、使ってはいけない表現だと知っていたので、「おじいちゃん、その言い方はもうしてはいけないんだよ。差別表現になるんだって小学校で習ったよ」といったわけです。

【編集者】大正く平成を生きてこられた、お祖父様の持つ「答え」と小学生の角井さんの学校で習った「答え」が違ったと。「正しさ」ともいえるでしょうか。生きてきた時代が違ふのですから、起こりえることですよね。その時は怒られましたか？

【角井】いいえ。でも、後から私は間違えたなと思いました。なにかを表現するときそれらを使用すること、傷つける目的で使用するなどはあってはならないことです。それが家庭内であっても。でも私も子

どもすきました。祖父のことを考えられていなかった。

【編集者】もう少し、詳しくお聞かせください。

【角井】同じ気持ちになることはできないけど、想像はすべきだったといえますか。祖父が使った差別用語は、昭和初期、特に戦時中は普通にみなさん使われていた言葉だったのでしょうか。大学生のころ、古い新聞でも見かけた気がします。プロパガンダの一環でしょうね。あの時、私は気づけなかったのですが、祖父が使ったその言葉には、熱い血が通っていたのですよ。当時を生き抜くには持たざるを得なかった感情が。悲しみが、憎しみが乗っていたのです。それを踏まえて私は話をするべきだったと、高校生くらいになってやっと気づいたのです。「悪い言葉だから指摘するのは正しいことなのだ。」という拘り定規な考えは、争いを生みますよね。幸い、家族だから、幼い孫だから、許してもらえたわけです。むしろ祖父は「日本は平和になったのだ」と感動してすらいました。

【編集者】素直な正義心も、伝え方によっては傷つけることもあると。

【角井】「悪いことだと習ったから」というだけで、相手のことを考えずに振りかざしては、問題は良い方向には進みません。相手はもちろん人間で、自分とは経験や生きてきた場所や文化が違うから、考え方が違う



学校ではひょうきんな一面も見せる角井先生

のです。同じ気持ちになることはできないのですよ。想像してお互いを思いやり、妥協点を見つけることしかできないのです。当時小学生だった私には気づくことができなかった。私が、祖父からこの本を通して「考えろ」と言われている気がするというのは、こういうことです。「平和は大事」で終わってはいけません。個々が考えるべきだと。

【編集者】最後に、この本を紹介することを通して、大阪国際の生徒へ伝えたいことはありますか？

【角井】「相手の気持ちになって考えてもらえ」と小さな子どもたちがよく言われました。みなさんもういられませんでしたが。いまのみなさんは、そこから先に進

むことができる年齢だと思いましたので、今回この本を紹介して、いろいろと話をしてみました。たとえばんなに好きな相手でも、100%同じ気持ちになるということはできないのです。家族でも、一卵性の双子でも、です。だから人間には想像する力があるのだと私は思います。論破するために人は議論をするわけではありません。誰かを傷つけるために正しさがあるのではないのです。お互いを思いやり、その時々で妥協点を見つけていきましょう。そのためには、自分の言葉で的確に心の中を表現する力と人の話を注意深く聞く力が必要です。この学校にはそれらを培うことができる施設や行事がたくさんあります。在学期間中に少しずつ養ってもらえたらと願っています。